

新潟日報

[視点アジア](#)

〔分かち合う世界へ〕 51、「自活自援」好循環生む

アジア自立支援機構代表理事・小沼廣幸

2022/2/7 16:50

この1月の末、久しぶりにタイ北部の山岳地域を旅行してきた。当法人（アジア自立支援機構）が3年ほど前から支援しているタイの少数民族、アカ族のメーチャンタイ村でのコーヒー生産と加工・販売を中心とした村民の自助努力による収入と生活改善を目指したプロジェクトの視察が目的だった。

総戸数40戸、人口230人ほどの小さな村が、山深い標高1500メートルの山の頂にぽつんと隠れるように存在する。途中までは舗装されているが、最後の5キロほどはデコボコの道で四輪駆動車でなければ登れない。いまだに電気や電話回線、学校もなく、村人の生活は不自由が多いが、村はコーヒー生産に惹（ひ）かれた若者たちの活気で溢（あふ）れていた。かつては現金収入が乏しく、2000年ごろまでは山を転々と移動する焼き畑農業や禁じられていたケシの花の栽培をしていたという。プミポン前国王の厚意でケシの栽培をやめる代わりに自然保護林に定住してのコーヒー栽培が許可された。そして、20年ほどの歳月を経た現在、良質なアラビカコーヒー豆の生産が本格化し、タイ全国の特選コーヒー品評会では3位に入賞するまでに至った。

とはいえ、生産されたコーヒー豆は仲買人たちに安く買ったたかれ、他のコーヒー豆と混ぜられたりして、メーチャンタイコーヒーの名前を知る人は少なく、村人の生活はなかなか改善されないでいる。そうしたジレンマが村人の結束を呼び起こし、コーヒーの共同加工処理や販売促進、メーチャンタイコーヒーのブランド化への期待が高まった。そして、当法人に支援の依頼があった。3年ほど前のことだ。

最初は、「自活自援」を本当に実践してくれるのだろうか、と半信半疑だった。

ところが、心配に反して、コーヒーの共同加工場の建設はこちらが建築資材を提供しただけで、実際の土木工事や建設工事は村人が総出で行い、大工などの賃料も村人が共同負担した。こちらで提供したコーヒー豆の脱穀機や焙煎（ばいせん）機は、組合で共同管理

し、利用者から使用料を徴収し、その収入のうち約3割がコーヒー共同加工場の維持・運営費や燃料代に充てられ、2割が村の共同福祉事業に使われ、残りの約5割が村の共同基金として貯蓄されていた。元々、そういう条件で提供した資機材だったが、約束が守られ、実際に役立っているのを自らの目で検証して、自分たちが行っている支援事業は間違っていない、と実感した。ブランド化を目指して、メーチャンタイコーヒーはバンコクの直営コーヒー店で販売されているほか、昨年は合計で120キロの生豆が当法人の社会福祉事業の一環として日本に輸出されて渋谷や函館などのホテルで宿泊客に提供されている。また、インターネット販売で焙煎したメーチャンタイコーヒー豆が日本国内でいつでも、どこでも買えるようになった。こうした支援の輪がもっと広がることを心から期待したい。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士（農学）。元国連食糧農業機関（FAO）事務局長補兼アジア太平洋局長。元明治大学特任教授。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人（非営利）アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。